

“つくる” “たべる” “まなぶ”

帝京大学教育学部 齊藤貴大

「学食を一度食べてみたいんだよ！」

最初の電話でそう話し、学食と対話のために二度も学校へ足を運んでくれたのは、料理サークルの代表を務める 60 代男性の L さん。

好きなことを好きにだけ

L さんは 40 代で退職をした。引退後は家にいる時間が多くなった。ある日、保健センターで料理講習があることを知り、参加することにした。5 回参加した後に、「サークルとして立ち上げない？」と職員から提案され、参加したメンバーたちと現在のサークルを発足した。

こうして公民館への第一歩を踏み出し、公民館歴は 20 年以上。三代目の代表として約 9 年携わっている。また、また手打ちそばサークルにも所属している。「自分で打ち始めると他のそばを食べられなくなる」と話す L さんに、自身もそば打ちをする筆者も共感の嵐であった。料理以外にも取り組んでいるのが陶芸だという。サークルは解散してしまったが、アトリエに足を運んでは腕を磨いているという。

臨時休館になったことで、再開した趣味もある。30 代に始めたへら鮎釣りだ。約 3 か月、集まった釣り仲間 40 人とともに釣った鮎の大きさを競い合った。L さんが釣った鮎は 50 センチを超え、仲間たちの中で一番大きな鮎だったと話してくれた。

和気あいあい

普段の活動は月に 1 回。それでも、調理中に冗談を言い合うなどゆるい感じで活動しているという。うちはね、先生も含めた皆が和気あいあいと活動しているよ」と L さんは語る。こうした活動が出来るのも、食材の準備から調理の説明まで親身になって動いてくれる、3 人の先生のおかげであると教えてくれた。

また、他の料理サークルと協力して調理室の大掃除等も行っている。こうした活動をするのは、「公共施設を使わせてもらっているから、大切にしよう」そんな思いがあるという。ただ感謝するだけでなく、改善してほしい、良くないと思う点には意見をしていることも話してくれた。

「こんなところで終わらせない」

そんな活動を一変させたのが臨時休館であった。休館中、サークル全体で連

絡を取ったり、プライベートで連絡を取ることはなかった。利用料がタダという点で、公民館ほど利用しやすい場所はない。そうした理由から活動の継続もできなかった。

「料理するだけなら各自でもできるが、それは広い調理場所で、先生や仲間とわいわいしながら料理する楽しさはない。それじゃ料理を作る意味がない」とLさん。サークルが再会した際に、活動を充実させる計画は今のところないのだという。今の活動状況に満足しているし、これからも、同じように仲間と和気あいあいとできればベストであると語った。

臨時休館を経験したことで、「やっぱり皆冷めてんだよね。退会の申請なんかきたら嫌だな」と話す場面もあった。活動を継続できなくなったのは辛いですが、支えてくれる仲間のために、こんなところで終わらせないようにしたいと熱く語るLさんであった。

人生勉強サークル

「ここに来ることで見解が広がる。皆でわいわい料理すると心が豊かになるよ。」

ただ料理を作って食べる場所ではない。自分がしたことのない経験をし、出会ったことのない人と繋がることで、多くの学びを吸収することができる場所なのだ。

Lさんにとってサークルは、「人生勉強の場所」でもあるのだろう。